汲古一心

『書の楽譜』

中村素堂

昭和四十四年の夏、三河の吉良中学校の校歌を作ることになって、自分が歌詞を作り、作曲を古関裕而先生がやって下さった。

音楽にはことにうとい自分は、このとき初めて作曲の正式の料紙というものを見ることができた。いかにも典雅なその独自の五線譜に書き入れられた楽譜を見、専門の分野にあるしきたりのひとつを覗いて、何かほれぼれとしたものを感じていた。

こういうものが原本というものだと知ると、印刷された楽譜とはまた違った息づかいを感じ、このような楽譜で演奏しあるいは唱ったら、またおのずから作曲家の心に触れる深いものがありはしないかなどと、素人はしろうとなりの思いをはせてもいた。

ひるがえって、日本のいわゆる和楽の譜を思い出してみると、これはまた本来諳譜のものの心覚えかと思うほど、簡素な毛筆のたて書き、ゴマ点とか、片仮名のしるしとか、かぎ印のようなものが添えられていたり、あるいは片仮名だけの譜のようなものもある。

笛の譜、謡曲、長唄、尺八など、みなその例のように思う。

しかし、これはやはり印刷物でのこと、関白道長の真筆という「神楽私謬秘譜」などを見ると、原稿のような感じもするが、何か生きているもののようである。自分の家にも旧姓が八雲といったゆかりかどうか、八雲琴の譜が大分あったが、これもやはり筆写の短い巻き紙風であったが、和楽ならではの匂いのようなものを感じさせられた。

そういう巻の形のもの、折本の形のもの、綴じ本のもの、むかし角倉素庵の出版した角倉本という謡本などは、料紙・装幀みな内容を離れても、立派な美術品であったことなども、それからそれへと思い浮かべられ、さてそれが泰西の音楽関係のものではどうかなどとなると、これはさっぱり見当もつかない知識の貧困さ。

ただ隣りの中国は、近世に入るころから詩箋という紙が作られ、詩の贈答にはその専門の用紙が使われ、その色彩・図案の傑作も少なくないが、これは直接音楽と結びつくものではない。

この方面では日本の方がはるかに上で、遠く平安のころから国民詩である短歌の料紙は、懐紙のようなものがいく通りか決まっていたり、藤原期に入るとこの書写の帖や巻子本も多くなって、和歌専用の紙は染色からも図案からも洗練に洗練を重ね、地模様のある上にさらに金泥銀泥で描き入れられた草木鳥虫の模様、さらにはこの完成した紙を手で雲とか水とかの形に破り、別の紙と継ぎ合わせるとか、斜めに切り取った一方に対照的な色の紙を貼り合わせるとか、またそれを何段にも重ねて貼るとか、その上に金銀の砂箔を置くとか、全くけんらんたる料紙を作る。これはその紙漉きの段階から、すでにそのパルプに色を一部または全部に漉き入れてゆくという凝りようで、これはむかしよりずっと質素なものではあるが、今日でも色紙・短冊にこの例はいくらでも見られるのである。

この和紙のほかに中国輸入の地模様をもつ紙も、平安朝初期から大分きていて、それにも以上のような加工をしていたりするのだから、多彩を極めたものではあったことは、想像もつこうというものである。

こんな料紙を使って個人の歌集とか勅撰の集とかの短歌を書いて、観賞上の――つまり読むというより観る方からも、それを美術的にたのしむという文学本を作って今日に及んでいるのである。

これは芸術のためにはその手数を惜しまない中国その他でも、まずあまり例のないことではあるまいか。（つづく）

〈『書の手帖』昭和四十六年一月〉

『筆間雑記』中村素堂随筆集（昭和六十三年刊）より転載。